

朝鮮通信使関連資料

江戸時代（1603～1867）には 12 回にわたって朝鮮半島から外交使節団(朝鮮通信)が日本を訪れた。2017 年には、これらの使節団に関する文書が、日韓の関係構築と文化交流の歴史を記録したものとして、ユネスコの「世界の記憶」に登録された。この使節団は、16 世紀後半に日本の朝鮮侵略で終焉を迎えた両国の外交交流と平和的な関係の再構築に貢献した。「通信」とは「相互の善意を表す」という意味である。このような相互尊重を特徴とする通信は、江戸時代を通じて両国の平和を維持することを可能にした。また、鎖国時代には、このような文化・学術交流が行われており、貴重な文化・学術交流の機会となっていた。しかし、日本への渡航費や豪華な宿泊費が両国の経済的負担となり、結局、派遣は中止されてしまった。

ユネスコに登録された資料の一つに、下蒲刈島の松濤園の朝鮮通信史資料館に展示されている絵巻物がある。第 10 次朝鮮通信使が、韓国船を曳航している数百隻の岡山の小型船の助けを借りて瀬戸内海を航行する様子が描かれている。特にこの絵巻は、観客の驚きの表情を映し出し、外国人訪問者を見たときの会話等を記録している点で重要である。

漢城（現ソウル）から江戸（現東京）に向かう一行は、通常、瀬戸内海を通過する。この航路の重要な寄港地であった下蒲刈島の港は、広島藩（現広島県）の接待所として、朝鮮からの来賓客を歓迎し、もてなす役割を与えられていた。江戸で旅の様子を聞かれた一行は、下蒲刈島のもて

なし（御馳走）が一番だったと答えた。これを記念して、朝鮮通信使資料館は「御馳走一番館」と呼ばれ、朝鮮通信使に出された豪華な食事を忠実に再現している。

これらの宴会は、歓迎の儀と実際の食事の 2 つの部分から構成されている。歓迎会での食事は、「七五三の膳」と呼ばれるスタイルで提供された。七五三の膳とは、通常、15 品の料理を七・五・三の 3 つの膳に分けて提供するもので、縁起が良いとされている。歓迎会の場合は、7 品と 3 品のコースを 2 倍にして、5 品のコースで 25 品を提供している。これだけ手の込んだ演出とはいえ、この料理は食べるものではなかった。参加者は「食いたい」と思ったものを手に取り、お皿に取って箸をつけるが、儀式の間は実際には何も食べなかった。実際に食べる食事が提供されるのはその後だった。「七五三の膳」のように、彼らが食べる食事でもまた、確立された形式の贅沢版であった。当時の徳川将軍の食事は「一汁三菜」が一般的だったが、朝鮮通信使の食事は「三汁十五菜」と呼ばれた。これらの食事は季節の食材を使用し、食事の際にそれぞれの食材がわかりやすいように調理されていた。歓迎式で使う具体的な食材や品目は幕府の命令であり、それらを集めるのに何ヶ月もの準備期間を要することが多かった。

展示の中心には、蒲刈の拠点に向かう通信使の行列の生き生きとした模型がある。また、朝鮮からの渡航時に使用された船の模型を 10 分の 1 の縮尺で詳細に再現したものや、代表団が着用したであろう朝鮮式のガウンを着た実物大のマネキンなども展示されている。館内には明治時代（1868

～1912) に建てられた邸宅を利用し、展示室としている。元々は富山県にあった商家で、その後、松濤園に移設された。この他にも3つの展示館があり、それぞれ別の建物として展示されている。

松濤園には、宮島(広島県)の古い町家もあり、江戸時代の伊万里焼の陶磁器のコレクションを展示した陶磁器館、山口県から移築した世界各国の灯明を集めた民家「あかりの館」、下蒲刈島御番所には、弓や銃などの古武器が展示されている。